詩歌合

文明十四年九月

詩哥合

一番　山路紅葉

左　　　　従一位源通秀

楓葉霜顔如月天今詩逢想趁山邉

殘紅吹乱杏杉外一抹斜陽錦様鮮

右　　　　女房

もみぢ葉はぬさともちらすやまおろし

ゐかめしかなみのそこもら霧

二番

左　　　　釋永崇

湿不成乾秋色荒満山紅葉夜来霜

詩哥合

一番　山中紅葉

左　　　従一位源通秀

楓葉霜頻九月天　吟詩遥想楚山邊
殘紅吹乱杏杉外　一抹斜陽錦様鮮

右　　　女房

色ふかき峰もとの木葉わきたてゝ
るはめてしかゝるみ山のもみち葉

二番

左　　　釋永崇

深不成乾秋色荒　满山紅葉夜来霜

久曽神蔵書

聖朝自有太平象　楓上又看棲鳳凰

右　無品親王

日なかいまさえて山ハもみぢの色もいたし
みなきれくなかなよきさとのうちのはな

三番

左　権大納言藤原教秀

曉霜深染景佳哉　一抹斜陽蜀錦开
不識秋光幾千樹　吟随流水上崔嵬

右　式部卿邦高親王

おしなへてやどりゆきさへおりぬ秋もなし
わすれぬ色ハいはふもみぢ葉

四番

左　釈等貴

獨憐楓樹倚山隈　霜後空開錦繡堆
紅葉勝花亦何益　停車人少径無媒

右　入道親王道永

山風のこゑもみぢ葉もみちはちらしなまで
世のながめさしもにきこてかへる葉

五番

左　権大納言藤原高清

満林無處不霜楓　裁錦深紅又淺紅
此地却疑裂呉楚　染成葉々照山中

右　　入道前左大臣女

しくれゆく山のかよひちわけもすゝし
ころもにそめしくれぬる日ゝのもみちを

六番

左　　釋景茝

行入溪限小径斜　楓林紅處両三家
山舎日暮停車語　似道花時無此花

右　　前内大臣

風のうけたるをもよしなし小車の
こゝろしめよ心にも思ふまかせてみちも葉

七番

左　　大藏卿藤原經茂

昨夜清霜深尚不満　山葉々着紅綢
有誰能織得斯地　移作五雲天上秋

右　　按察使藤原親長

くる人をもみちのにしきのやまかつは
秋ともしらぬふしきなるらむ

八番

左　　權中納言藤原廣光

幽径秋荒霜色深　満山楓樹映斜陰
吟遊多是停車處　葉々紅飄夕照林

右　　從二位藤原敦國

うゑのつくしきはしくれ木末のはてはあらしにあひけり
あいよりあをくしくれとそ見る

九番

左

殘楓樹々弄秋光　吟歩忘帰石逕長

権中納言藤原實隆

一鳥不鳴霜葉底　回頭木末欲斜陽

右

参議侍従

山ひめのくれなゐふかきこゝろにはさらにとみえ
ちしほそうすきもみちとやみん

十番

左

釋兼英

青女染成楓樹紅　満山落日繍屏風
遊人不到三叉路　葉々勝花嵐翠中

右

参議左中将藤原季経

時雨ゝ日をへてもみちわくらむ
きみきのをてらす木のはそもなる

十一番

左

浮嵐雨過較流楓　染得山々秋色紅

蔵人神祇少副卜部兼致

落日餘暉堪畫處　霜裁雲錦小屏風

右

参議藤原基綱

萩かえたちぬるゝもかはの秋きりのしみつる

かみちもおくもぬかなよ山この那

十二番

左　散位菅原和長

詩景楓龕更佳　遥攀渓路坐停車
秋山変作春山否　葉々紅深霜後花

右　右中曽藤原為廣

おひとのさめぐるいはやまぞさらし山
ぬかなよりみぢ乃きちぬるんさてし葉

十三番　田家秋寒

左　釈景蓭

秋亡東時寒更忙　田村月色夜蒼々
秖将鶉鵲啄残粒　添得暁紅霜有香

右　女房

かぜいたり志川のかもぬきいろ祢のてらし
あさせ乃あらしのつゆをくちかね

十四番

左　大蔵卿藤原経茂

田村秋闌一間廬　風扣柴扉寒雨疎
白首老農蓑袂短　比時豈耐荷犂鋤

右　無品親王

もてあそす山田のいねをたゆしもされ
あきさむやたちたちおとろかさら葉

十五番

左　釋兼英

八九田家村路傍風吹杷穲映斜陽
秋天平野人帰後寒鴈飛邊足稲粱

右　式部卿邦高親王

そおく人乃あさむもゆそな思ふへや
いな葉乃露つもる霜まよふらん詠

十六番

左　散位菅原和長

桑村桑柘暁霜乾田水遶門秋正闌
葉自落窓々自葉砧聲響月不堪寒

右　入道親王道永

唐衣うつくかりのなみたこそ立ちまたなくて
いな葉乃露乃秋さえきこ詠

十七番

左　權中納言藤原實隆

自春艱苦至秋闌遺穂在田相共歡
縣吏憐民租不重妻児衣破豈憂寒

右　入道左大臣女

いなおろし秋風やすゐひよりそ絶えて
ころもはさむし袖の中ふの歌

十八番

左　権中納言藤原広光

東作西収歳漸闌田翁住処露溥々
稲粱刈尽秋風夕想是吾庵次第寒

右　前内大臣

わかいほのあきもさひしかりの世に
宿乃こゝかしこもりにうつけるかな

十九番

左　従一位源通秀

桑柘斜連茅屋荒村々黄落覓秋忙
郎随遠戍寒衣未砧杵声哀数夜霜

右　按察使藤原親長

ふく嵐もまてこのやま田もるいほに
露おりこゝろふかくての秋かせ

二十番

左　蔵人神祇権少副卜部兼致

寂々田村秋已闌数間草舎月西残
老農夢暁緑蓑底不堪五更風露寒

右　従二位藤原敦国

婦さむしなく山田秋いほのあさまくも
たしなみけむかしかくふしつゝれ

廿一番

左　釈等貴

今誇昔讓尭舜民　稲粱秋老不余貧
夜寒如此田家底　又被鳥声催着新

右　参議従三位藤原政為

日をへつゝ秋や日ゝしかたをかの
門田のいなほこきとゝて濱

廿二番

左　権大納言藤原高清

収斂未終秋色深　田村戸々搗(衣ニ)清砧
近年租重衣猶薄　月冷風寒思不禁

右　参議左中将藤原季経

色浅き蓬やまさむるらんあき風の
霜ふきむすふをと田のいほりかな

廿三番

左　権大納言藤原教秀

禾黍吹寒霜露滋　豊登端在泰平時
家々不啻黎民楽　鶏哺新雛牛引兒

右　参議藤原基綱

麻のはもまたひかくさむなるを山田の
稲葉もひまゝに穂やもみらん

廿四番

左　釈永宗

田家漏鼓易黄昏穲稏經霜稠秋一村

茅舎弁蘿聞好語五風十雨是天恩

右　　左衛門督藤原為家

夕されはいはねの雲に出ていに
しらくさむさし小田のあさこに鶴

廿五　鶴伴仙齢

左

有鶴翩々剛翅翮　等閑言是共仙齢
一鳴記得千年後　羽化帰来人姓丁　　釈等貴

右　女房

あはれくみん久にわかつるを仙人か
よろつちきるに世乃友哉

廿六番

左　従一位源通秀

一双白鶴自蓬壺　丹頂霜毛又互呼
月落雲梢夜将半　夢醒声似祝皇図

右　世良親王

仙人のすむてふ波まもきみにあへん
千代ちきる雲井よまつちきるらし

廿七番

左　　釈永崇

鶴自千年松万年　縞衣丹頂勢昂然
人間咫尺仙宮隔　一隻何時騎上天

右　式部卿邦高親王

きのつゝきすゝしく千とせやあらむこの川も
ながむ仙人をも　松かげにして

廿八番

左　権大納言藤原教秀

鶴自蓬莱来九皐　莫言三万里波濤
為君似祝無疆寿　松頂霜雪清唳高

右　入道親王道永

千世をへて人もめくしも沢それ仙人の
すみかはなるゝ流ぬの月の影

廿九番

左　散位菅原和長

洞裏喬松半掩庭　枝抽金碧鶴金翎
千年色似歟　君寿応伴仙家共制齢

右　入道前左大臣女

千世まてもちとせやみさのん風下人に
すみくとしぬる流るのもとにふる

三十番

左　権大納言藤原高清

仙鶴裳玄李独青　不知深洞幾秋蛍
清遊佳興奏琴傍　白日飛昇共制齢

右

前内大臣

いく千世をふるとも雲井は友鶴も
すむ仙人もおなしくらゐにて

廿一番

左

一隻高翀蓬嶋天　玄衣丹頂伴飛仙
莫冷雲母隨彭祖　猶欠蟠桃着子年
　　　　　　　　蔵人兵部少輔卜部兼致

右　　　　　　　　　按察使藤原親長

仙人はくゝいふしちとせもおしきとも
しりかぬるあきらけれ君よゆつりて

廿二番

左　　　　　　　　　釈兼英

仙鶴声從天上聞　千年祝寿伴吾君
青松累破縞衣雪　飛入蓬莱玄素雲

右　　　　　　　　　従二位藤原敦秀

あしのけ鶴流もさかのゐてやま人は
みかきも海のする千代乃支流累

廿三番

左　　　　　　　　　釈景范

起尺蓬莱擁五雲　玉簫声裡鶴成群
夜深宴飲未飛去　永似仙遊献寿君

右　　　　　　　　　参議侍従藤原政為

千世はまつかよふや雲井仙人も

すゑなかれ流るゝちよもたひへにすめる

卅四番

左　大蔵卿藤原隆茂

神仙遊處鶴相随　共約長生不用騎

也識吾皇千萬壽　霜毛雪羽立丹墀

右　参議左中将藤原季経

こと語とりにとせやはきる千ちよくの

流留きもちくなるゝやまめと

卅五番

左　権中納言藤原実隆

一雙白鶴唳青天　不識駕来何處仙

借問年々養雛日　幾回看盡海成田

右　参議藤原基綱

雲井よりおりつゝてなのこゑきけ

らくしとろひちよふる鶴の那

卅六番

左　権中納言藤原廣光

三珠樹上鶴群遊　丹頂縞衣終日眠

恐見蓬萊不飛去　遐齢相伴幾千年

右　右衛門督藤原為廣

老らくのよはひしとこゝろにやすまん人流

門のる鶴のちる流代の丁ゑ

文明十四年九月廿八日

110x
647
17
17

文明十四年九月廿八日